



Psychometrics of rating scales for externalizing disorders in Japanese outpatients: The ADHD-Rating Scale-5 and the Disruptive Behavior Disorders Rating Scale

メタデータ	言語: en 出版者: 公開日: 2024-07-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 石橋, 佐枝子, Ishibashi, Saeko メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10098/0002000302

学位論文審査の結果の要旨

<p>※ 整理番号</p>		<p>ふりがな 氏 名</p>	<p>いしばし さえこ 石橋 佐枝子</p>
<p>学位論文題目</p>	<p>Psychometrics of rating scales for externalizing disorders in Japanese outpatients: The ADHD - Rating Scale - 5 and the Disruptive Behavior Disorders Rating Scale 日本の外来患者における外在化障害評価尺度の心理測定学的検討：ADHD 評価スケール (ADHD-RS-5) と破壊的行動障害尺度 (DBDRS)</p>		
<p>審査委員</p>	<p>主査 友田 明美 副査 松崎 秀夫 副査 小坂 浩隆</p>		
<p>注意欠如多動症(ADHD)は、世界の児童青年の約 5%が罹患している神経発達症であり、ADHD を持つ児童青年の約半数が、反抗挑発症(ODD)や素行症(CD)などの破壊的行動障害(Disruptive Behavior Disorders : DBD)を併存し、ADHD のみの場合と比べ、学業成績の低下、犯罪行為、健康状態の悪化、早死等に至る可能性が高い。また ADHD の症状は状況により異なる現れ方をする場合があり、複数の状況で症状を評価し、親や教師など複数の情報提供者から、ADHD と DBD の症状に関する情報を収集できる評価尺度の使用が推奨されているが、本邦では ADHD と DBD を同時に測定できる尺度の日本語版がないのが現状である。このため本研究では、ADHD-Rating Scale-5 (ADHD-RS-5) と Disruptive Behavior Disorders Rating Scale (DBDRS)日本語版を作成し、その信頼性と妥当性を検証した。さらに ADHD-RS-5 に ODD と CD の下位尺度を追加して拡張し、頻度ベースの ADHD-RS-5 と強度ベースの DBDRS による反応形式の違いが心理測定学的特性に与える影響を検討した。</p> <p>6~18 歳の患者 135 名を対象とし、半構造化面接 Kiddie Schedule for Affective Disorders and Schizophrenia Present and Lifetime Version (K-SADS-PL) for DSM-5 に基づくゴールドスタンダード診断、子どものグローバル評価尺度(CGAS)、子どもの行動チェックリスト(CBCL)とともに、ADHD-RS-5 と DBDRS の日本語版を、親と教師に実施した。これらの各下位尺度の内的整合性、試験再試験信頼性、構成概念妥当性、基準関連妥当性を検討した。</p> <p>ADHD-RS-5 と DBDRS のすべての下位尺度について、ADHD-RS-5 拡張版の CD 下位尺度以外の親版と教師版のいずれも Cronbach の α 係数が 0.83 以上と良好な内的整合性が示され、試験再試験信頼性は、親版の全ての下位尺度で $ICC=0.66-0.89$ と良好であった。構成概念妥当性は、CBCL の下位尺度と 2 つの評価尺度の下位尺度との間に、関連が高いと予想された項目に相関が認められ、収束的妥当性と弁別的妥当性が示された。ROC 分析の結果、親版では ADHD-RS-5 拡張版と DBDRS の全ての下位尺度で基準関連妥当性が優れていたが($AUC>0.9$)、教師版では全ての下位尺度で予測能が大幅に低下した。親版と教師版の一致度は中程度であり($ICC=0.43-0.64$)、統合方法の比較では、ベスト法が最も高い予測能を示し、次いで平均法、親版のみであった</p> <p>本研究により、ADHD-RS-5 と DBDRS の日本語版が原版と同等の心理測定学的特性を有することが示され、親版と教師版の評価の違いや、頻度ベースと強度ベースの異なる反応形式の影響など、新たな心理測定学的知見が追加された。本研究の知見は、日本の臨床現場における ADHD、ODD、CD のスクリーニングおよび重症度評価に役立つものであり、精神保健・教育現場での活用が期待でき、臨床的意義が高いと考えられる。以上の知見により、本学学位論文として十分価値あるものと認める。</p> <p style="text-align: right;">(令和 6 年 4 月 25 日)</p>			

最終試験の結果の要旨

<p>※ 整理番号</p>		<p>ふりがな 氏 名</p>	<p>いしばし さえこ 石橋 佐枝子</p>
<p>学位論文題目</p>	<p>Psychometrics of rating scales for externalizing disorders in Japanese outpatients: The ADHD - Rating Scale - 5 and the Disruptive Behavior Disorders Rating Scale 日本の外来患者における外在化障害評価尺度の心理測定学的検討：ADHD 評価スケール (ADHD-RS-5) と破壊的行動障害尺度 (DBDRS)</p>		
<p>審査委員</p>	<p>主査 友田 明美 副査 松崎 香夫 副査 小坂 浩隆</p>		
<p>上記の者に対し、 口 頭 により、学位論文を中心とした関連分野について試問 筆 答 合 格 と判定した。 を行った結果 不合格</p> <p style="text-align: right;">(令和 6 年 4 月 25 日)</p>			